

〈鳥海山麓だより〉二〇一二年春

犬が西向きや尾は東

鈴木京子

二〇〇六年の夏から、秋田県と山形県の県境、日本海に裾野を浸す鳥海山の麓で暮らしている。

近年、注目を集めている半農半Xは「自分たちが食べる分だけの『小さな農』を行いながら、好きなことや天賦の才を活かした仕事で社会に貢献し、一定の生活費を得るという新しいライフスタイル」だそうで、「X」は人が本来持っている天賦の才能とか「未知なるもの」を意味するらしい。

一方、私は、農(Agriculture)と無償活動(Volunteer)と自分なりの現金収入の道(X)が、時間的にも労力的にも等分に近い「AVX」だ。Xに「才能」とか「やりがい」とか「社会貢献」など求めない。好きかどうかも関係ない。労働や物の「交換」では賄い切れない生活必需分の「現金」を、できるだけ他者から搾取することなく稼げればよい。

田舎暮らしで一番の難関は何と言ってもXだが、暮らし始めて二年を過ぎるころから、少しずつ「手間(稼ぎ)」を頼まれるようになった。

雪解けすぐ四月半ばの稲の種まき、それからひと月後の田植え、パプリカや大根、メロン、スイカ、庄内柿などの畑仕事などなど。地元の人が「あれだけはイヤだ」と口をそろえる無農薬田の草取りは時給一〇〇〇円。それ以外はだいたい七五〇円。どの作業も農繁期の一時的なものだから、一日だけ、三日だけ、長くても一カ月、中には一日三時間を一週間というものもある。どの雇い主さんも町の農業委員会が定める「農作業基準賃金表」を下回らない金額をきちんと払ってくれる。

ほかに、稲刈り時の一カ月は農協のコメ倉庫、十一月と十二月のもち屋、二月と三月は合宿生相手の



自動車教習所の食堂など、日雇い・季節雇いがある。

山形県の最低賃金は時給六四五円だから、私の手間賃は高いのかもしれない。しかし、年々、声をかけてくれる人が増えている。つまり、田舎では引き受け手のいない労働なのだ。そして、そのおかげで私の暮らしが成り立つ。

専門的な技術は何も身に付いていないけれど、四十女がひとり、ここで食べて暮らしていきける自信がついたので、今年からは「百姓おんな」を名乗ることにした。

今年の春は二軒の農家に雇われて九日間田植えをした。

ここ庄内平野は昔からのコメどころだ。四月半ばには雪解けの進む鳥海山の山肌に「種まきじいさん」の雪溪が現れて麓に稲の種まき時期を知らせる。そして「さつき」がやってくる。

日本語で「さつき」と言えば五月だが、ここでは田植えそのものことも「さつき」と言う。雪が解けて白鳥が帰っていった田にいつせいに水が張られ、その水鏡にキラキラと鳥海山が映る。「さつき」が近づくと町中がそわそわし、死にそうだったじいさんが生き返る。ホント！「年を越せるか」と心配されていたじいさんが、野良着を着て杖をついて登場したりして本当にびっくりするけれど、ここでは珍しくない。

稲作農家トオルさんの妻ノリコさんは町の病院で事務職をしている。トオルさんちの田植えでも、七十代のおじいちゃんが目を光らせる。息子が乗る田植え機の前足を細かくチェックし、時に大声での親子ゲンカにもなる。

「おじいちゃん、元気だね」

「んだあ。田のことはお父さんにも任せ切れなくて。田植えが近くなるといつもケンカみてえなつて。今朝もご飯食べながら言い合ってるもんだから、娘に『おめえらあつちでけっ（食え）』って言われて」

「さつきになれば、死にそうないさんも生き返るもんね」

「んだ、んだ。オレ、病院に入院してるおじいさんに、今週末はさつきだねって言ってしまったら、おじいさん、『さつきか？へば、帰んねばなんねっ』って騒ぎ出して。さつき教えたオレが看護婦さんにごけられた（叱られた）」

七十代以上の人たちは、苗代・手植え・手刈りの時代を知っている。高度経済成長でどんどん上がる労働者の賃金と都会の繁栄を横目に、一粒でも多く収量をあげ少しでも豊かになろうと、田の中を這い回ってきた人たちだ。積み上げてきた確かな経験と自信を、そう簡単には曲げられない。

「どこの家でも、息子はオヤジの言うことを聞かないもんだ。犬が西向きや尾は東だ」

昨年の農協理事選で落選し、タダの農民に戻ったハジメさんが教えてくれた。犬が西向きや尾は東……。なるほど、確かにそうだ。

田植えでは田植え機に苗を積み込んだ後、往復して帰って来るまでの間がおしゃべりタイムになる。区画整理で田が大きくなってからネ、四、五分話せる。

六十二歳のハジメさんは農家の長男だが、農家がイヤでイヤで仕方なかった。なんで？
「だって、貧乏だからさ」。

今でも夫婦ゲンカをすると妻が持ち出す話がある。ハジメさんが若い頃、農家の跡取りや嫁が自分の報酬をもらえることはほとんどなかった。おそらく、渡せるだけの世帯収入もなかったのだ。子どもが生まれても家族旅行にも行けなかった。

あるとき、自分の家の稲刈りが済んでから他の家の手伝いに行き手間賃を得て、鳴子温泉に念願の家族旅行に行った。子どもは六歳と三歳。

「カネもなかったし、子どもがそんなに食べるとは思わなかったのさ。二人分しか食事を頼まなかった。そしたら、母ちゃんのお膳を子どもがみんな食っちゃった。『子どものことも考えず自分だけ食べて私は何も食べられなかった、アンタはそういう人だ』って、いまだに言われる」

そりゃ、妻が正しい。ずっと言われ続けるしかないネ。

「地震や津波だけならなあ……」

水を張った田の中を、まっすぐこちらに向かってくる田植え機を見つめながら、ハジメさんが言った。大震災後の原発事故の影響で福島では水田も作付けが制限された。

残留放射能の高いところでは今年の作付けは制限されることが決まりました——そう伝えるテレビニュースを聞いて、「今年だけ」と理解する農民はいない。



田植え機を運転する著者

〈著者プロフィール〉 鈴木京子 1968年、茨城県生まれ。フリー記者。2006年より山形県遊佐町で農と稼ぎの百姓暮らし。